



写真1 テレビ放映された「深江音頭」の復活
(読売テレビ「読売テン」2021年11月7日放映より)

よみがえった深江音頭

深江音頭復活プロジェクトチーム

復活の日

令和三年十月六日、深江浜町にある兵庫県立東灘高等学校のグラウンドに軽快なリズムに乗せて、楽しい歌詞が流れた。歌とリズムに合わせ一〇〇名を超える女子高校生がいくつかの輪を作って踊った。

た。

観覧する保護者、招待を受けた地元深江の人々にとっても初めて目にする歌と踊りである。流れる音楽に乗せて「深江よいとここ」というはじめのフレーズが繰り返され、六番まで一気に女生徒達の踊りが披露された。世情に

ざわすいわゆるコロナ禍の中で、その暗雲を払うような気分を浮かれさせる歌と踊りだった。

この日、東灘高校で披露されたのは、令和三年から平成、昭和と三つの世を経て七二年ぶりによみがえった深江音頭だった。昭和二十一年に作詞作曲され、以後昭和二十四年まで毎年深江の大日神社境内で地元の人々が歌い踊った音頭である。

その深江音頭が消えて、七〇余年。歌った人も踊った人も遅からず消える時代になっていた。そのような時代にあって令和三年十月六日は、深江音頭がよみがえった「深江音頭復活の日」だった。

深江音頭が出来た頃

昭和二十一年五月二十日は「深江の祭り」の日だった。本庄小学校の授業は十九日の宵宮は午前だけ、二十日本宮はお休みだった。当時深江は、神戸市と合併する前で本庄村深江と呼ばれ、村を挙げての行事だった。

村は、一年前の複数回にわたる空襲で多くの家が焼かれ、亡くなった人や傷ついた方も多くいた。人々はそのような中でも再び村を立て直すべく歩き始めていた。家族を失った方も少ない「喪中の村」というような複雑な感情の残る時代だった。

そのような中で「深江の村を生き返らせよう。お盆に慰霊と復活を込めて歌と踊りを作ろう」と、戦前から深江で地域の世話をされていて、後に本庄村議員になる黒田清一氏が作詞した。その詩に本庄村役場に勤務されていた関西学院大学グリークラブOBの細野寛一氏が曲をつけた。作詞作曲ができたときから、その両氏の夫人が三味線で伴奏し、振り付けを行い、地域の子

供を中心に踊りの稽古を行った。

深江音頭の歌詞には深江村の風情が込められている。作詞に当たっては、特に深江浜、漁業の様子について実際に漁業に携わっていた人々の話や言葉を聞き取ったといわれている。焼け野が原になった深江の村の風情を歌と踊りに託したのである。

ところが、深江音頭が大日神社の盆踊で歌い踊られて三年、昭和二十五年には消えてしまった。真偽のほどは不明だが、当時は神戸市や芦屋市との合併問題で村が分裂せんばかりの混乱で、「深江、深江ばかり言うのはいかななものか」という風潮もあったとせいだとも言われている。

地域が一体となって

敗戦の焼け野が原から七〇年が過ぎたころ、阪神深江駅が軌道の高架化にもなっており、新装された。駅全体の完成に合わせて構内で「深江独自の音楽を流すことが出来ないか」と、阪神電車の澤昌弘御影駅管区駅長から東灘高校（徳山学校長）に打診があった。高校は、深江塾の森口代表に相談を持ちかけた。深江塾からは「深江音頭」という歌と踊りがあった。毎日、多くの高校生が利用する駅で深江独自の音楽を知ってもらおうのよいのではないかと。地域の人にも知ってもらえる」と提案させていただいた。

新装の深江駅のデザインは深江の海、波をシンボル化したものである。駅が独自のものであるなら流れる音楽も独自のものがよいと、学校、地域、企業が一つとなって、消えた深江音頭の再現を目指して、深江南ふれあいのまちづくり協議会に「深江音頭復活プロジェクト」を立ち上げた。



写真2 写真のキャプションづくりに地域史を学ぶ

プロジェクトの合言葉は「復活と継承」。深江音頭の復活と継承を通じて「深江の町の活性化、町興し、知名度向上」を目指すことを目標とした。広報活動は最初に阪神電鉄深江駅で音頭の復活や由来の説明板揭示と、曲を構内で流すこと。次に「深江音頭の風景」と銘打って、神戸深江生活文化史料館の協力を得て六カ月間の企画展示を行うこととした。

展示は、史料館の大国館長の発案で地域の歴史を学び、作業もするという手法を取り入れた。史料館が歌詞に歌われた風景の古写真候補を提供し、東灘高校の写真部員らがその中から展示写真を選択した。森口らが当時の時代背景などを語り、高校生が深江の歴史を学び、歌詞に込められた風景を理解したうえで下書き原稿を作成した。これを大国館長が修正を加え、キャプションとしたうえで、八頁のパンフレットの版下を作成し印刷所に持ち込んだ。

マスコミに対しては高校がプレスリリースを行った。その結果、朝日新聞は九月九日朝刊、神戸新聞は十月九日朝刊に掲載



写真3 展示を取材する読売テレビのクルー

された。さらに十一月七日には読売テレビの人気番組「読売テレビ」の中で「よみがえる深江音頭」として約一〇分間の特集が放映された。

歌詞については、七五年前に大日神社でこの音頭で盆踊りを世話した方の手書きの歌詞が伝えられていた。活字になったのは昭和五十年代に発行された本庄小学校同窓会誌に、当時の同窓会会長であった志井保治氏が「歌は世につれ」と題して寄稿した文章が最初のもので、本誌三九号に「深江物語(1)―昭和二〇年代の駅前界隈を歩く」と題して筆者が歌詞と経緯を報告した。

プロジェクトチームは、作詞、作曲者の特定、当時の曲踊りの制作背景や目的の調査を手始めに音頭復活の活動を開始した。歌える人の最年長者は一〇〇歳だった。しかし曲を復活

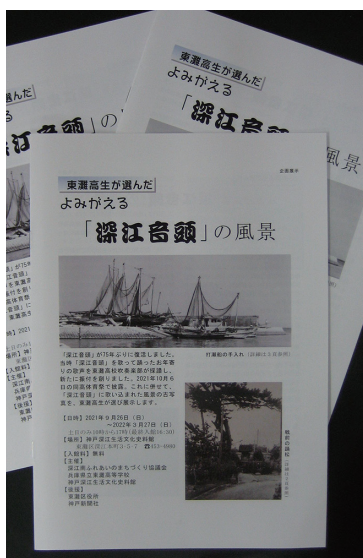


写真4 「深江音頭の風景」のパンフレット

させるためには録音し採譜する必要がある。昭和二十二年当時は小学生であっても実際に深江音頭を歌った方に協力をしていただいた。

曲については東灘高等学校放送部が録音、吹奏楽部がその録音をもとに採譜した。踊りについては、映像記録がないため日本舞踊の師範の藤間祥寿師に歌詞と曲を伝えて令和版深江音頭の踊りとして創作していただくことになった。

プロジェクトは、六カ月の準備期間を経て令和三年四月からメンバーを決定の上、本格的に活動を開始した。四月に活動を開始したのは、東灘高校が兵庫県から「コミュニティスクール指定校」となったことを受け、その組織の主たる活動として実施することにしたためである。「復活の日」は東灘高等学校体育祭の日とすることを決定した。また展示は写真二〇点に加えて史料館が収集した史料を「東灘高生が選んだ よみがえる「深江音頭」の風景」と題して開催。東灘区役所・神戸新聞社の後援を得て二〇二二年九月二十六日から翌年三月二十七日まで展示した。

若人の声・東灘高等学校生から

深江音頭の譜面作成に携わり、校内で試験演奏したときに部員を取材した。その時の東灘高校吹奏楽部の話を紹介する。

「和楽としての音頭と自分たちが練習している洋楽との差を感じたが、よい勉強になった」

てみれば気分よく演奏できた。これが音頭の良さかと思う」
 「この歌にある言葉（歌詞）やリズムが深江なのだと実感できた気がする」
 「メロディーが明るい感じで、町おこし復興のイメージとしてすばらしい」
 「自分たちも深江の歴史の一翼を担えることができたかな、という達成感に満たされた気分です」
 「こんなすばらしい歴史的活動に、東灘高等学校が関われたことに感謝し喜びたい」

さらに、新聞報道やテレビ放映の後、プロジェクトチームに



写真5 展示の前で昔語りに興じる
大西令子さん（右端）

「歌の合いの手
の言葉に、
人が音頭の歌
詞と歌を通じ
てキャッチ
ボールをして
いるような一
体感を感じ
た」「録音さ
れた歌を聴い
たとき、洋楽
器で演奏でき
るか不安が
あった。しか
し、実際やっ

寄せられた声があります。

「深江にこんなに素晴らしい音頭があったのか。誇りに思う」
 「深江の知名度が上がるし、街の印象もよくなるだろう」
 「もっとこんな埋もれた歴史的財産を掘り起こして知らせるようになりたい」

新聞とテレビ放映の報道結果からは、このプロジェクトが目指した「町の活性化や町興し、知名度向上」に寄与できたことが読み取れる。

【参考資料】

深江音頭

- 1 深江よいとこ 潮風受けて ヨイヨイ 今日も出船か勢ぞろひ 沖にや 網船 ポンポ船 大漁、大漁で 戻り船 アリヤサット サット 戻り船
- 2 深江よいとこ そよ風受けて ヨイヨイ 六甲降れば復興町軒並みそろへて 大繁昌 栄え栄えて 明けて行く アリヤサット サット 明けて行く
- 3 深江よいとこ 六甲のおろし ヨイヨイ 高い高橋 踊り松卯の花祭りの お神輿を 浜の戎さんが 手で招く アリヤサット サット 手で招く
- 4 深江よいとこ ちぬの海 ヨイヨイ 恋の散歩も 白浜ふんで 沖のかもめや 浜千鳥 甘いささやき 波の上 アリヤサット サット 波の上
- 5 深江よいとこ 朝日を受けて ヨイヨイ 今日工場で 槌の音 稲も豊作 黄金波 皆笑顔で 暮れて行く アリヤサット サット 暮れて行く

6 深江よいとこ 復興は進む ヨイヨイ 踊りおどれば 彼の娘は唄う 歌え踊れや 朗かに 手並みそろえて 深江音頭 アリヤサット サット 深江音頭

【歌詞の補足説明】

2番の「大繁昌」「栄え栄えて」は、現在の深江北町の旧町名で「繁昌町」「繁昌通」、同じく「栄町」「栄通」を指す。

3番の「卯の花祭り」は、現在の大日神社発行の書面などでは「卯の葉祭り」となっているが、戦前から昭和三〇年代前半までは深江の祭りは「卯の花祭り」と称していた。

4番の「ちぬの海」は大阪湾の雅語で、本庄小学校の校歌にも使われている。

5番の「稲も豊作」は深江が半農半漁の村であったことを表わしている。大日神社の法被や浴衣の模様が「波」と「稲穂」も同じ意味。

深江小唄

1 深江名所は 踊り松 高い高橋 片葉葦 卯の花祭りの 伊達姿 末は鶴亀 五葉の松

2 澄んだ青空 磯の松 波はさざ波 白帆が見ゆる 粋な姉さんの 艶すがた につこり笑へば 片えくぼ

3 今日東風 出船の支度 向ふ鉢巻 玉の汗 エンサエ ンサの 勇み肌 続く大漁で 大囃

4 白い砂浜 恋の夜 好いた同士の 忍び逢い 彼の乙女の姿が 浜千鳥 何に啼くのか 帰り雁

この歌詞は二枚の便箋に書かれており、末尾に制作発表の日や作者の氏名が下記のように記載されている。

昭和二十一年五月二十日

作 詞 黒田清一 作 曲 細野寛一

三味線 細野光子 踊・振付 黒田浜子

このたびの「深江音頭復活プロジェクト」では、「深江小唄」の曲は発表していないが、東灘高等学校吹奏楽部では譜面を作り演奏もした。小唄の踊りについては現在、藤間祥寿師によって創作を検討中である。

【深江音頭復活プロジェクト】

歌唱再現 藤本吉江・大西令子（両氏とも深江南町在住）
採 譜 林 賢美・浜田梨花（東灘高等学校吹奏楽部）
演 奏 県立東灘高等学校・吹奏楽部の皆さん

舞踊指導 藤間祥寿（藤間流師範）

舞踊助手 太田由美子・森口聡子（両氏とも深江南町在住）

プロジェクトメンバー（順不同・敬称略）

事務局長 大利清隆（深江南町三丁目自治会会長）

撮影記録 納多章央（深江札幌地区自治会会長）

メンバー 徳山 学（県立東灘高等学校 校長）

浅田正樹（県立東灘高等学校 教頭）

木村一成（県立東灘高等学校 教頭）

西山重樹（県立東灘高等学校 写真連盟理事長）

大国正美（神戸深江生活文化史料館 館長）

植田延生（深江南ふれあいのまちづくり協議会委員長）

谷屋正廣（深江南ふれあいのまちづくり協議会監査役）

中井新三郎（深江南町四丁目自治会会長）

森口健一（深江南町二丁目自治会会長・深江塾）

総指揮

